



Title	第21回ワークショップ西洋史・大阪 報告要旨 : 2016年5月28日・大阪大学
Author(s)	小林, 和夫; 伊藤, 嘉純; 原田, 昌博 他
Citation	パブリック・ヒストリー. 2017, 14, p. 91-93
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/66571">https://doi.org/10.18910/66571</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

### 1. 19世紀前半の西アフリカ海上貿易における綿布輸入再考

小林和夫（日本学術振興会特別研究員 PD・東京大学）

本報告では、イギリスとフランスの貿易統計を用いて、19世紀前半の西アフリカに海上ルートを通じて輸入された綿布の量的動向について、種類別・地域別に把握することを試みた。それを通じて、フランス領セネガルではインド綿布（ギネと呼ばれた藍染綿布）の優位がみられた一方で、イギリスの貿易圏であった他の西アフリカ諸地域では、1820年代からイギリス綿布の優位がみられたことが明らかになった。後者の地域で競争力を高めたイギリス綿布は白・無地のキャラコや染物・柄物のキャラコに限られ、モスリンやファスティアンには当てはまらなかったことが判明した。実際に貿易統計からは、当時の西アフリカにおけるモスリンやファスティアンの輸入量は、インド綿布（染物）の輸入量に及ばなかったことを読みとることができる。

これらの知見は、当時の西アフリカでは異なる社会構造に基づく複数の経済圏が存在していたことに加えて、各地の消費者の嗜好や消費パターンがヨーロッパからの綿布輸入やアフリカ大陸以外での綿布生産に影響を及ぼしていた事実を示している。その一方で、綿布の輸入量増加は、パームオイル、アラビアゴムや落花生など一次産品に代表される「合法的」貿易の成長と密接に結びついていたことから説明できる。この時代には、多数の小規模事業者が新たに海上貿易に参入したことが知られているが、それは輸入綿布にアクセスできる購買層も拡大したことを意味していると考えられる。

### 2. 第二回三頭政治期のローマ植民市コリントスにおける政治状況と指導者

——二人官就任者の分析を中心に——

伊藤嘉純（名古屋大学大学院）

本報告は、ローマ植民市コリントスにおいて、初期の政治状況が都市指導者層の形成にどのような影響を与えたのかを検討することを目的としていた。前44年の植民市建設直後からコリントスではローマでは認められなかった解放奴隷の公職就任例が確認されており、初期の政治指導者層の性格が問題とされてきた。近年では、ローマ人権力者や有力商人家系との紐帯をもとに、社会的支持基盤を持った家系による公職の独占と階層の固定化が進んだとする見方が有力となっているが、この見解は外的要因である建設以降の政治情勢の影響を考慮に入れていない点で不十分である。そこで本研究では、第二回三頭政治期からアウグストゥス治世までの時期を対象として、二人官就任者の構成に着目し、アントニウスが失脚した前31年の前後の就任者の政治的立場をローマ人権力者との関係から分析した。そこから、(1) 前30年以後に

それまで多数派を占めていたアントニウス派が急減し、(2) イタリアの有力商人家系と関連を持つと見られる人物がアウグストゥス治世に増加したこと、とりわけ(3) 後者の Heius 氏族に関しては、前 30 年代に発行した貨幣のモチーフとアウグストゥス治世での皇帝家との結びつきから、当初からアウグストゥスに友好的であったこと、の 3 点を指摘した。以上から、コリントスでは前 30 年頃の政局の転換が指導者層の構成の変化をもたらし、その後の階層の中核をなすイタリア系商人家系の進出と台頭を導くことになったと結論付けた。

### 3. 第二帝政期ドイツにおける「政治的酒場」の成立

——ワイマル期の酒場に関する議論の前提として——

原田 昌博（鳴門教育大学）

本報告は、第二帝政期ドイツにおける労働運動と酒場の関係の検討を通じて、「政治的酒場」の成立を明らかにしていくことを目的とした。

19 世紀後半のドイツでは、都市では労働者の人口が急増し、それに伴って酒場での飲酒行為も盛んになった。その結果、労働者の飲酒癖とそれに関連するとみなされた社会秩序の乱れや犯罪の発生を非難する声が高まり、世紀転換期には禁酒運動が登場することになった。しかし、社会主義者鎮圧法（1878～1890 年）の弾圧の中で、社会主義労働運動は酒場の奥座敷を拠点として集会やアジテーションといった政治活動を行うようになり、ドイツ社会民主党内では、K・カウツキーによる酒場擁護（1890 年）以後、禁酒運動よりもアルコール（ビール）や酒場に対する擁護論が優勢となっていった。こうして、19 世紀後半の酒場は労働運動との結びつきや労働者たちの社交を通して政治化していき、労働者たちが政治的な議論や情報交換、新聞・雑誌の閲覧などを行う一種の公共圏として機能するようになっていった。それは 18 世紀にカフェやコーヒーハウスで成立した市民的公共圏に対する対抗公共圏であった。

第二帝政期に成立した政治的酒場は、ワイマル共和国期にナチスや共産党などさまざまな政治的党派の酒場が登場することで分極化するとともに、政治的街頭闘争の出発点としての役割を担うようになった。つまり、酒場は弾圧を逃れるための「隠れ家」（第二帝政期）から街頭での公然たる活動の「前線基地」（ワイマル期）へと変化していったのである。

### 4. 中世後期イングランドにおけるジェントリの大衆経験

古城真由美（福岡大学）

15 世紀イングランドのジェントリとは貴族と農民の間に位置する中小土地保有階層であり、地域社会の運営の中心であった。従来、先行研究はジェントリの政治的ネットワーク分析を主眼とし地域社会の権力構造の解明を試みてきたが、近年、政治以外のジェントリの社会生活に

着目し、再検討をする潮流が大きくなりつつある。本報告は、これに鑑み、先行研究で検討されることが少なかったイングランドの大陸拠点であったカレーでのジェントリの暮らしぶりを、サー・ジョン・パストンの事例から明らかにすることを目的とし、彼の手紙から検討を行った。本報告の検討からは、第一にカレー長官であったヘイスティングズ卿に信頼され守備隊のメンバーとしてカレーに渡ったサー・ジョンが、責任をもってカレー防衛にあたりフランス人と戦ったことが指摘できる。また、他の兄弟たちにとっても、カレーの守備隊への参加は暮らしに十分な賃金を得られる場所であった。そして第二に、カレー防衛のために海を渡ったサー・ジョンは、カレーでの滞在や大陸での貴族との出会いを楽しみにしていたことがうかがえる。カレーは大陸文化に触れられる娯楽の場所でもあったのである。サー・ジョンにとってカレーでの従軍は地元ノーフォーク州での政治的ネットワークの構築や拡大にもあまり意味をなさなかった。しかし、大陸文化に触れられ、娯楽が楽しめる都市カレーは、例えばサー・ジョンのような宮廷人を自負するジェントリを満足させてくれる場所ではあったが、彼らがその場所にアイデンティティを抱くほどのものではなかったのである。

## 5. イギリスにおける反奴隷制運動の意味と意義

——奴隷制改善の試みの検証から——

並河葉子（神戸市外国語大学）

イギリスにおける反奴隷制運動は、奴隷人口の維持が当初大きな目的のひとつであった。運動の中で交わされた議論は、奴隷人口を維持するための「奴隷制改善策」が多くを占めていた。とくに「生む性」である女性の奴隷や将来的に労働力となる子どもについては、単なる「労働力」としてだけではない価値が見出されていき、出産した奴隷に対する報奨金や子どもたちの保育方法の改善などが試みられていた。

19世紀初頭から目立ってきたのが、奴隷に対するキリスト教布教である。18世紀まではイギリス領西インド植民地社会はイギリス本国とは法的にも宗教的にも異なる社会であるとされていた。ところが、イギリス本国の非国教徒たちは、国内でのソーシャル・リフォームと並行して、イギリス領西インド植民地内でも同様の活動を進め、本国同様にキリスト教的な社会の構築を目指すようになった。非国教徒たちがイギリス社会に一定の地歩を築くと同時にイギリス領西インド植民地も、反奴隷制運動を通じて、本国の法制度や社会制度に次第に統合されていった。もっとも、奴隷たちがイギリス的価値規範を受容したとはいえ、人口維持という改革の目的は達成されないままであった。

反奴隷制運動期の諸改革は、アメリカ喪失後のイギリスがイングランド人を中心とした国から帝国へと変貌を遂げ、多様な人びとを統合していく過渡期を象徴するものであったといえよう。